

- 樹一編『つくる・つかう』京都大学学術出版会, 165-200.
- 環境省. 2016. 生態系被害防止外来種リスト. <https://www.env.go.jp/nature/intro/2outline/files/gairai_panf_a4.pdf> (2023年5月18日)
- 国土交通省. 2013. I 外来植物対策の考え方. <https://www.mlit.go.jp/river/shishin_guideline/kankyo/gairai/pdf/tebiki03.pdf> (2023年5月18日)
- 近藤 史. 2016. 「半乾燥地域の林業を支える火との付き合い方—タンザニア南部, ベナの農村の事例から」重田真義・伊谷樹一編『争わないための生業実践』京都大学学術出版会, 181-213.
- 沼田 真編. 1988. 『生態学辞典』築地書館.
- 小倉 謙. 1968. 『植物の事典』東京堂出版.
- Blench, Roger and Mallam Dendo. 2006. The intertwined history of the silk-cotton and baobab. Paper presented at: 4th International Workshop for African Archeobotany. Groningen.
- Yadav, D. and SP. Singh. 2017. Mango: History Origin and Distribution. *Journal of Pharmacognosy and Phytochemistry* 6(6): 1257-1262.

インド北部・写本調査ガイド

森 口 遥 平*

本稿では、2022年夏にインド北部のウッタラプラデーシュ州の2都市で実施した写本調査について報告する。報告者の研究テーマはスーフイズム（イスラームの神秘主義）であり、目下のところ、17世紀ムガル帝国で活躍したチシュティー教団サービリー派スーフイー（スーフイーは、イスラーム神秘主義に基づいて修行や思弁をおこなう人のこと）、ムヒブラー・イラーハーバーディー（Muhibb Allāh Allāhābādī (Ilāhābādī) (1648年歿)の思想を研究している。同思想家は多作で知られたが、その著作のほとんどは出版されておらず、21世紀になって今なお、手書きで記された写本がインド各地の図

書館などに所蔵されている状態である。そのため、彼の思想を研究するためには、通常思想研究（西洋哲学など）と異なり、まず手始めに、テキストそのものをインドで収集する必要がある。本報告が、今後インドでの写本調査を計画している学生や研究者のお役に立てば光栄である。なお、記載された情報は、全て2022年夏時点のものである。

①アリーガル (Aligarh)

報告者が最初に訪れたのは、首都デリーから電車で2、3時間ほどの小都市アリーガルである。この地には、アリーガル・ムスリム大学という総合大学があり、イスラーム関連

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科



写真1 アリーガル・ムスリム大学のモーラーナー・アーザード図書館

の文献を数多く所蔵するモーラーナー・アーザード図書館 (Maulana Azad Library) が併設されている。この図書館には写本を専門に扱う部署 Manuscript Division があり、報告者はこの場所で人生初の写本調査をおこなった。ここからは、報告者が訪問した初日から写本のデータを入手した最終日までの経緯を時系列で記していこう。

まずは、図書館 1 階の事務室で利用者登録をおこなう。京都大学からの紹介状を提出して、申請書を記入したうえで、別室の係員に申請書と顔写真を渡す。こうして 2 週間有効の来訪者カードを受け取る。今後は毎日の入館時に、このカードを入口の受付職員に見せるとともに、中央閲覧室の受付でもう 1 回見せて、来訪者台帳に名前を記載することになる。なお、図書館内では英語はつうじる

ものの、ヒンディー語やウルドゥー語での会話だと対応がスムーズになる。

次に、2 階の写本閲覧室に入室する。入口は行ってすぐのところ大きな机があり、そこで写本を閲覧することになる。いわゆる誕生日席に同部署の責任者が座っているため、「これから 2 週間、写本調査します。日本から来た森口です」と挨拶する。この部署内では、アラビア語とペルシャ語もつうじる。なお、初来訪時には簡単なものでよいので、必ず日本から手土産を持参して渡すようにしたい。このことで、今後の利用時にさまざまな便宜を図ってくれることがある (もちろん、図ってくれないこともある。報告者は扇子を持参した)。

責任者から「写本の写真は、決して撮らないでほしい」と厳重な注意を受けたうえで、いよいよ写本の調査を開始するわけだが、インドに滞在したことがある方は、現地で「〇〇禁止」と言われても、実際は周りの人が平然とおこなっていたり、行為中に咎められてもゴネたら見過ごしてもらえたり、という経験があると思う。ただし、この部署内では、指示に従い、撮影は慎んでほしい。たしかに写本のコピー代は高価なのだが、もしあなたが勝手に写真を撮っていたことがバレた場合、今後の来訪者の写本閲覧が制限される恐れがある。「旅の恥は掻き捨て」とはいかず、自分よりあとに訪れる研究者のことを常に考慮する必要がある。

壁際にアラビア語資料とペルシア語資料のカタログがおいてあるが、前述の責任者曰く、カタログには記載されていない資料もあ

るとのことだったので、全ての資料情報が個々に記載されたカード目録をアラビア文字順に手繰っていく。そして、いよいよ目当ての資料を見つけたら、閲覧室まで持ってきてもらうように依頼する。この依頼は必ず紙でおこなうのだが、閲覧室には特に所定の様式の依頼書はないため、報告者は100円均一ショップで買っていったメモ帳に書いてはちぎって、提出していた（失礼ではなかったと信じたい）。

しばらくすると係員が写本を持ってきてくださるのだが、それを受け取って一安心、というわけにはいかない。というのも、カード記載の書誌番号と実際の資料に付された番号に食い違いがあり、別の写本がやってくることもあるためだ。また、ごく稀にだが、係員が取り出す写本を間違えることもある。というわけで、まずは手元に来た写本が本当に目当ての写本なのかを確認する。

そして、正しい写本ならば、そのなかのどこからどこまでのコピーを取りたいかをメモする。その際に、ひとつの著作がひとつの冊子になっているなら問題ないが、複数の著作がひとつの冊子にまとめられているケースが多々あるので注意が必要である。自分が入手したい写本は何葉から何葉かをしっかり確認しなければならない（「葉」は写本における専門用語で、紙1枚の表裏で1葉。ページ換算だと2ページ分。申請用紙に記入する数字が、「葉（フォリオ）」か「頁（ページ）」かは要注意）。

以上の過程を繰り返して、自分が取りたい写本とコピー箇所のリストをつくる。私自身

は2週間の滞在で、18点の写本を確認した。そして、リストが完成したら、いよいよコピーの申請をおこなう。アラーガル・ムスリム大学の場合、紙でのコピーは対応しておらず、全てデジタルコピー、つまり、写本のデジタルデータを渡してもらう形式となっている。

この申請も紙でおこなうのだが、やはり申請書は存在しないため、報告者はルーズリーフに書いて、提出していた（失礼ではなかったと信じたい）。ちなみに書く内容は、「Dear 図書館長、写本 No. xx の何葉から何葉まで複写してください。（取りたい写本分繰り返す）自分の名前・所属」だったと記憶している。

さて、この申請書を書いたら、あとはつづがなくデータが手元にやってくる…なんてことはない。データ入手までには相当の手順が存在する（おそらく雇用と職務を設けるために、あえて段階を増やしていると思われる）。そのため、必ず時間に余裕をもって、対応を依頼する必要がある。

まず、申請書を私が1階事務室に持っていく。事務員が内容を確認したのち、図書館長に回す。図書館長が押印して、事務室に戻ってくる。私がそれを受け取って、別室の経理窓口へ提出して、所定金額を払う（インド人は1葉10ルピー、外国人は1葉1USDドル、約8倍！）。もらった領収書を写本閲覧室にいる責任者に渡す。ここまでが前半である。

後半は、まず責任者がコピー係に指示を出し、彼らが手分けして写本をスキャンする。



写真2 イラーハーバーディーの墓廟

そして、コピー係から責任者に終了報告がなされる。その後、責任者から声がかかるので、USBなどのデジタルデバイスを責任者に渡す。USBがデータ係に手渡されて、データが移される。データ係は責任者にUSBを渡す。責任者は私にUSBを渡す。終了。たしかに長いですが、その分やり遂げた達成感がある。

こうして、アリーガルで無事に写本データを取り終えた報告者は次の街に向かった。なお、今回は利用しなかったが、アリーガル・ムスリム大学の歴史学科図書室にも多くの文献コレクションが所蔵されている。機会があれば、今後ぜひ訪れたい。

②アッラーハーバード／プラヤーグラージ (Allahabad/Prayagraj)

次に報告者が赴いたのが、ウッタルプラデーシュ州の州都アッラーハーバードである。州都だけあって、インドの各都市から国内便のフライトが存在するが、空港と都市中心部は車で40～50分ほどの距離がある。なお、報告者の研究対象のイスラーム神秘思想家が生まれた都市であり、その名は彼の名前の由来にもなっているのだが（アッラーハーバードはイラーハーバードとも呼ばれており、イラーハーバーディーとは「イラーハーバードの出身者」の意）、同地のヒンドゥー教的伝統を尊重するとの理由で、2018年に「プラヤーグラージ」へと都市名が変更されている。この街では、イラーハーバーディーの子孫が今も運営するスーフィー修道場（ハーンカーという）で写本収集をおこなった。

まず、初めて訪問した日は、道場主に挨拶をした。当然その際に手土産を渡すことを忘れない。日本からの研究者が来たのは初めて、とのことで喜んでくださった。続いて、イラーハーバーディーのお墓にお参りする。道場から少し離れた街の一角にあったが、今でもそのまえて祈ってる人々がいた。その後、道場の事務室に保管されている各写本を、子孫の方のお立会いのもと、確認する。ここでの調査はいたってシンプルで、写本の必要な箇所をひたすらデジタルカメラで撮影していった（無料!）。もちろん、撮影の合間には、報告者の世話をしてくださった子孫の方が同年代であったこともあり、いっしょ

にチャイや噛みたばこ（タバコの葉と石灰の混合物を口に入れて、ガムのように噛む）を味わいつつ、スーフイズムについてはもちろん、お互いの家族の話などをした。一度は道場の近くに住む、ヒンドゥー教の司祭の家に遊びに行ったこともある。宗教の違いはあるけど、仲の良い友達とのことだった。

さて、実は報告者には調査をするまで、心配していたことがあった。それは「外国からいきなりやってきて、ただ写本の写真を撮って、さっさと帰っていく」みたいな感じにはしたくない、ということだ。やはり相手の生活空間に立ち入り、大切にしているご先祖様の形見に触れるわけなので、最大限の尊重と

感謝の意をもって接する必要があるし、私からも何かを提供したいと思っていた。今回の滞在中にともに語り、食事し、時々バイクで街を走り回ったことが、相手にとっても楽しい思い出になったことを願ってやまない。もちろん、子孫の方とは今でもSNSでやり取りを続けている（今この原稿を書いているときも、ビデオ通話がかかってきた）。

現地にいる間に収集した写本を読んでいると、日本にいながら、現在のインドはもちろん、写本がつくられた当時とも自分がつながらているように感じる。この感覚を楽しみながら、難解な思想書を今後も読み解いていきたい。

フィールドを決める

—私、この町が好きです—

岩井華代*

「いい町がみつかるといいね」

これは、宮崎駿監督作品『魔女の宅急便』において、旅立つ娘に対し、父親が言った言葉だ。魔女の子は13歳になると、一人前の魔女になるために、1年間の修行に出なければならない。13歳になった主人公のキキは、黒猫のジジと連れだって満月の夜に故郷を発

つ（『魔女の宅急便』より）。

2023年1月16日。フィールドワークを目的としたはじめての海外渡航に臨む。行きは機内での、なんとも言えない憂鬱さの理由は明らかだった。何かしらの「結果」をもって帰国しなければならないのだ、という重圧が重くのしかかっていた。

2ヵ月間のフィールドワーク中、私はこの

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科